

十七 明治から大正へ
(一)

文明開花の波は鉄道の敷設によって寄せてきました。新橋と横浜の間に鉄道が開通したのが、明治五年五月のことです。今と同じ公害問題がやかましく、やむをえず当時は、比較的人家も少なく寂しい所であった山王台地のすそから、新井宿、蒲田の方へと線路が定められたのだそうあります。これが幸いしたというか、山王台地の下を掘り削ったところ、たまたま出たのが大森貝塚で、ここが日本考古学発祥の地となったのであります。

大森に停車場ができたのは、明治九年六月で、そのころは東口に営業所がありました。出札はここでやっていました。西口（山王口）にはほんの仮小屋のようなものがあつた程度で、東京方面へ向かう乗客は常に不便を感じていたのでありました。このころから山王の台地には別荘式の高級住宅が建ち始めました。

土地の農民の中には、今まで手にしたこともないような大金で土地を手ばなした者もあり、その金でさらに土地を買い、また貸家を建てて利殖にはげんだ人や、たまたま手にした大金を茶屋遊びや、とばくに入れあげて姿を消した人もあつたとのことであります。

す。

このころは新井宿村でしたが、人口が一千人たらずだったし、隣の不入斗村も同じくらいの人口なので、合併して入新井村となりました。大森停車場の東口から大森海岸まで電車が初めて走つたのは明治三十四年でした。官鉄は蒸気列車でしたから、電車の方が座り心地もよいし、サービスもよかつたと、古老の話であります。

東口からは池上行きの馬車も発着していて、汽車、電車の音や、馬車のラッパの音で喧騒を極めていました。当時この辺は新井宿分になっていました。

現在の太陽神戸銀行前の国鉄ガードは、最初のころは踏切でしたが、明治四十四年に現在のように八景坂の下の方を削ってガードを造つたということがあります（馬車を通すためといわれている）。

官鉄の大森停車場と京浜電車の停車場の間には土産物屋が軒を並べ、名物の貝細工や、麦わら細工、魚の干物、海苔などを売っていました。現在の大森銀座通り商店街は、当時は大森停車場通りといって賑わっていました。

明治三十七年ごろ、山王に居住していた児島惟謙、加納子爵、矢野恒太^{やの つねた}、玉塚栄次郎などの著名な方々が、東京往復のため停車場で会合の都度、待合所の改善等が話題になっていた。

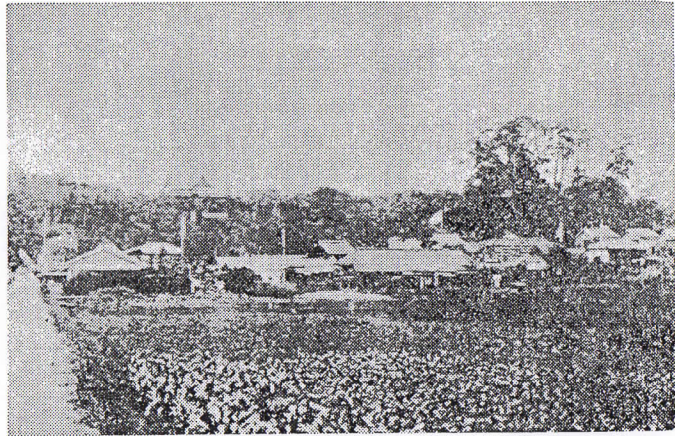
これらの方々が発起人となって、明治三十九年に大森倶楽部を作り、その待合所にあてました。倶楽部は洋風二階建てで、設立の目的を趣意書から拾ってみると、

①会員とその家族の汽車待合所にあてて。

②提灯、傘、下駄、泥靴を預かること。

この二つを真つ先に掲げ、碁、将棋、花、音曲などの稽古、娯楽親睦をあげ、なお日用品の購入や、毎日使いの者を東京に出して会員の物品購入の依頼を受けることがあげられていました。倶楽部の初代委員長は、大津事件で有名な元大審院長児島惟謙がなり、ついで加納子爵や、後の総理大臣清浦奎吾などの名士がなりました。

大正二年七月に駅の山王西口出改札所ができ、初めて東西両口の跨線橋がつながることとなり、乗客の不便は解消されました。そして西口にも商店が次々と開かれ、人口の



大森八景圖（明治末）「入新井町誌」から

増え続ける山王を背景として、今日の繁栄のもととなるのであります。

大森貝塚は個人の邸宅の中にあつたので、一般には話題にもなっていないませんでした。

山王西口前の高台一帯は八景園といわれ、その名の如く大森八景を一望のうちににおさめ、風色佳絶の遊園地でした。これは明治十七年に久我邦太郎という人が土地開発の目的で、八景坂上畑地草原など一万坪の土地を買収し、八景園と称したもので、明治二十年になると皮付き丸太を材料とし、総わら葺きの中央に五十坪の大広間を有する広大な家を建築し、同時に梅桜その他多くの花樹を植え

ました。

二十一年には料亭を開業。武者料理と称して特に料理を名物として、もっぱら都人士の宴会、演説会などが行われて繁盛を極めました。八景園の名がだんだん世間に伝えられ、遠足、運動会なども行われ、郊外随一の遊園地となりました。

明治四十年、園内の料理屋は、松浅支店が経営していましたが、大正二年五月、同支店廃業とともに園内は荒廃してゆき、大正十一年にはこの土地が分譲され、一帯の別荘地となって現在に至っているわけであります。

八景園がまだ繁栄していたころ、昭憲皇太后が行啓にお成りになったことがありました。「東京府荏原郡誌」に、「明治三十五年十一月十三日昭憲皇太后は、入新井八景園にお立寄りあり、次いで加納子爵邸に成らせらる。御馬車は午前十一時門外に留り、香川皇后宮大夫御先導申上げて八景園内に進ませられ暫時御休憩後、加納子爵から枝柿三百顆を献上され、次いで八景園の裏道から加納子爵邸に成らせらる。子爵は御先導申上げて庭園に御着あり、直ちに左方に設けられた椅子に着かせられ、遠近の景色御眺望あ

らせ給ふ。……」と、あります。

京浜間に初めて電車が運転されたのは大正四年五月十日でした。このころには、山王始め木原山、於伊勢原や、大井庚塚、鹿島谷あたりまで豪商、政治家、学者、銀行家の方々が数多く別荘として週末に静養する場としたり、あるいはまた常住するようになっていました。土着の農家の人々が自分の持ち地に貸家を建てて、かなりの収入を得ていました。山王の発展途上期であります。

豪壮な構えの邸宅を建て徳富蘇峰が山王にきたのは大正十一年のことです。学者の河合栄治郎、和辻哲郎氏らが山王に住んだのは大正の初めころです。軍人も将官級の方が邸を建てられました。上原勇作元帥、西海軍中将、坂本一海軍中将らであります。

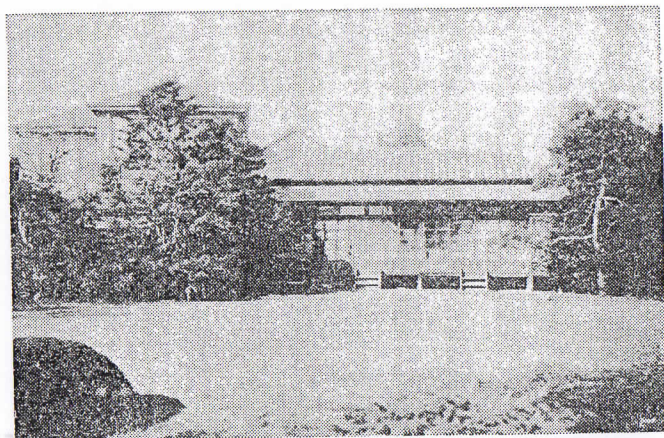
十八 明治から大正へ
(二)

農家や商店の数えるほどしかなかった山王も、交通の便を得て、どんどん新しい立派な邸宅ができました。

このころの様子を、矢野恒太氏は「入新井町誌」（昭和二年刊行）の序文の中で次のように書いておられます。

「明治三十六年、余が居を東京から大森（山王）に移した頃には、新井宿はまだ農村、不入斗は東海道の漁村と云ふ姿であつた。初めは今の望翠楼（現在はなし）の下登山氏邸の処に借家して居て、翌年今の岡本武次氏邸を新築し、其の翌年更に今日の地に移つたと思ふ。当時此地は竹藪であつたのを借り受け、切り拓いて宅地にしたので、左隣は地主橋爪氏、右隣は村民加藤氏、少し離れて西園寺侯の別荘、今の内田氏邸があつたけれども、庭へ立てば前は蒲田梅園まで一望唯稲田、左右を回顧しても家の棟一つ見へなんだのが、今日では前後左右櫛比せる人家の中に閉じ込められて了うた。

僕より前に東京から此町に移住した人々には加納子爵、井上、西園寺両侯、内村達次郎氏など数十人もあつたらうが、それでも新井宿不入斗両字を合して戸数五百とはな



加納邸（明治のころ）「入新井町誌」から

つたらうと思ふ。それが今は八千戸にも近くなつた。

明治の初めには不入斗の方は東海道で多少町がかつて居たかも知れぬが、新井宿の方は純然たる農村で山王台は狐狸の住む山林であつたらしい。然るに鉄道のかかる時元の大森宿で盛んに停車場を排斥した為に、政府は掘（よんど）ろなく品川から川崎へ一直線に出づべき鉄道を、くの字に曲げて新井宿といふ寒村に停車場を設けた。お蔭で今では新井宿から不入斗は大森繁華の中心となり、元の大森は殆世人から忘れられた様だ。

僅々四五十年の変化否、僕の体験二三十年

の間に此地の面目は全然一変してうた。今から五十年か百年か経つたら恐く想像もつかぬ様に変化するだらう——以下略」

もし同氏健在なるとすれば、現在の大森駅山王辺の繁栄にわが意を得たりと手を打たれるところでありましょう。

矢野恒太氏は、一八六五年に岡山で生まれた。第三高等学校医学部を卒業し、日本生命に入社し、のち安田善次郎氏に認められ、安田生命の支配人となり、外遊後第一生命と第一相互貯蓄銀行を起こし成功す。のち目蒲、東横の両電鉄の社長も兼ねる。居住地入新井の発展にも尽力せられ、明治四十年には村会議員となり、大正十四年ころまで何期も村政のためにつくされた（大正八年町政布かれる）。

また入新井発展に力を注がれた方で忘れてはならぬ人に、子爵加納久宜^{ひさよし}氏がある。

氏は早くから山王八景園に居を構えられ、明治三十五年十一月には、昭憲皇太后が同氏邸に行啓なされたことは周知のことであります。

子爵は夙に村の殖産興業に留意され、住民全体の経済の発達を図り、以て生活を改善

するには産業組合によらざるべからずとして、信用組合の設立に大いに力を注がれ、ここに入新井信用利用組合を設立。子爵は理事長として大正二年まで自ら経営に当たり、子爵夫人も書記として業務の発展に尽くされたのであります。

加納久宜氏は一八四八年に生まれ、上総一宮藩主の嗣となり、遠江守と称した。版籍奉還後大学南校に入り、卒業後文部省に入り、岩手師範や新潟師範の校長を経て、明治十四年転じて判事に任じ、のち検事に転じ、十七年子爵を賜った。二十七年より三十三年まで鹿児島県知事として令名があつた。同年九月休職となり、山王に住まれ荏原中学校長や、各種産業組合に尽力され、また大正五年ごろ入新井町の学務委員として町の教育にも力を注がれた方であります。

明治三十九年の大森倶楽部設立の発起人の名前を見ますと、当時の政財界の縮図をみるような気がするのであります。

玉塚栄次郎、永富雄吉、内村達次郎、岡本英太郎、児島惟謙、高井寿二郎、井上鑑三郎、安野譲、加納久宜、谷口真二郎、高久馨、内田嘉吉、大江卓、矢野恒太、島田久兵

衛、三島桂らの諸氏で、清浦伯爵は明治四十五年に山王に移住され、のち大森倶楽部委員長をされることとなり、同じころ山王に移住された立花種忠子爵も、倶楽部委員をやられました。

立花種忠子爵は長年入新井町長として町政のため努力され、また各種団体の長をなされた方で、出身は筑後柳河藩主の後裔であります。山王三丁目の薬師堂の前に戦前は玉塚栄次郎氏の壮大な邸宅がありました。その付近には玉塚商店の幹部社員の方々が集まっていました。玉塚栄次郎氏は大正十四年東京商大（現一橋大学）を卒業。「天保銭主義」を掲げて社礎を築いた初代栄次郎の跡をうけて玉塚商店の社長に就任、大いに販売網の拡大をはかつて社業の発展に尽くされました。今の新日本証券の前身であります。

永富雄吉氏は日本郵船の副社長として業界に貢献し山王在住も長く、日本郵船社長の伊東米次郎氏も大井庚塚に広大な邸を持つておりました。

倶楽部発起人の一人、内田嘉吉氏は明治二十三年東京帝大法科卒業、のち通信畑に入

り、大正十二年山本内閣の時の台湾総督として著名であります。

大津事件の児島惟謙大審院長も明治四十一年亡くなられるまで山王に住まわれました。

三島子爵（三島通庸の子息）のかつて住んでおられた家も最近までそのままでありましたが、今はマンションに代わりました。

倶楽部の発起人の中にある大江卓氏も、東京株式取引所会頭や、朝鮮の京城―釜山間の鉄道建設を完成させた功労者として忘れ得ぬ名前であります。

なお山王を、こんにちあらしめた土地の（土着の）功労者として忘れてならないのは大正八年以来、東京府議会議長を何期もつとめられた平林浅次郎氏と、素封家増井峯次郎氏らであります。